

系統的なアカデミック・イングリッシュ力育成のための指導に関する研究

A systematic way of teaching Academic English

服部 孝彦¹

¹大妻女子大学英語教育研究所

Takahiko Hattori¹

¹The Institute of Research in English Education, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：アカデミック・イングリッシュ，パラグラフ・ライティング，コミュニケーション能力

Key words : Academic English, Paragraph writing, Communicative competence

抄録

本研究は、以下の点を明らかにした。1970年代のHymesの理論以降に発展したコミュニケーション能力理論を整理し、コミュニケーション能力の全体像を明らかにし、コミュニケーション能力におけるアカデミック・イングリッシュ力の位置づけを明確にした。この理論研究を基に、文部科学省スーパー・グローバル・ハイスクール・アソシエイト校認定の都内私立中学・高等学校の全面的な協力を得て、英語に高い関心・意欲を持つ生徒たちが高校、大学と進学した際に高度なアカデミック・イングリッシュ力を、パラグラフ・ライティングを中心に身につけることができる指導法と教材を開発した。

1. 問題

グローバル化の進展で、我が国にとって世界で活躍するグローバル人材育成は急務である。文部科学省も海外留学をする高校生や大学生の留学経費支援を強化し、海外留学を促進している。留学をすることにより、同世代の外国人と意見交換をし、多様な価値観に触れ、国際的な視野の涵養および異文化理解を推進することができるのはいうまでもない(Lazrak[2017])。外国人とのコミュニケーションには国際共通語としての十分な英語の力を持っていることが必須条件である。さらに、留学を成功させるためには英語の4技能の力と共に論理的思考力も必要である。しかし英語の4技能と論理的思考力を育成し、真の英語コミュニケーション能力を習得する中高大連携のアカデミック・イングリッシュの力を育成するための指導法および教材の開発に関する研究は十分とはいえない(服部[2013])。

留学先の教育機関では、日本の中学・高校を卒業し英語圏の高校・大学に進学した場合も、また日本の大学在学中に英語圏の大学に長期留学した場合でも、留学先では専門書を大量に読んだり、

クラスで討論をしたり、リサーチをしてアカデミックなスタイルでレポートを書いたりできる英語力が必要である。留学するために必要とされるアカデミック・イングリッシュの力とは、日常英会話力やビジネス英語力とは異なる学術分野で必要とされている英語力である。特に英語圏の大学や大学院では、授業への積極的な参加や貢献が強く求められる。授業では頻繁にディスカッションが行われ、論理的で説得力のある発言が求められる。日常会話ができるといった程度の英語力ではとても通用しない。レポートも論理的な構成を重視した書き方ができる必要がある(Marshall[2017], Wallwork[2016])。日本の高校を卒業後すぐ、または大学生が大学在学中または卒業後に英語圏の大学や大学院で留学を成功させるためには、中学の段階からアカデミック・イングリッシュの学習をする必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の3つである。第1にHymesの理論以降のコミュニケーション能力に関する理論的考察をとおして、コミュニケーション能力の

全体像を解明し、英語コミュニケーション能力におけるアカデミック・イングリッシュの力の位置づけを明確にすること、第2に中学、高校、大学連携のアカデミック・イングリッシュの力を育成するための指導法を、パラグラフ・ライティング力育成を主に開発すること、第3に、中学、高校、大学へと段階を踏んだアカデミック・イングリッシュの力を育成するための教材を、パラグラフ・ライティング力育成を主に開発をすることである。

3. コミュニケーション能力論の検討

コミュニケーション能力の議論はHymesのコミュニケーション能力 (communicative competence) 概念の提唱にはじまる。Hymes[1972] は、単に文法的な可能性を判断できる能力だけでなく、実行可能かどうかを見極める能力、適切性を見極める能力、過去の言語使用に思いをはせる能力があつてこそコミュニケーション能力であると主張した。コミュニケーション能力論はその後、Canale & Swain[1980] が「第二言語教授方法論と評価手段を組織化し発展させるためのコミュニケーション的アプローチのガイドライン」を明らかにすることを目指し、研究の教育的姿勢が打ち出された。Canale & Swain はコミュニケーション能力の出発点(文法的能力、社会言語学的能力、方略的能力)と到達点(これら3つの能力の統合)を示した。社会言語学的能力の構成要素に関しては、言語使用の社会文化的規則とディスコースの規則の2つの集合から成り立っているとした。Canale[1983] はディスコースを社会言語学的能力から分化し、コミュニケーション能力は文法的能力、社会言語学的能力、ディスコース能力、方略的能力の4つから構成されるとした。この4つの能力は、文法的能力、社会言語学的能力の両方にディスコース能力が関わり、その3つの能力は方略的能力によって補助されていると考えられた。その後、Bachman[1990]、そしてBachman & Palmer[1996] がコミュニケーション能力を language competence や language ability という用語を使って論じたが、テストのためのモデルという色彩が強かった。

このようにコミュニケーション能力概念の誕生からその発展過程についての理論的枠組みの整理をおこなった。コミュニケーション能力の構成要素の中で、アカデミック・イングリッシュに深く

関係するのはディスコース能力である。ディスコース能力は、意味のある全体を組み立てられる能力で、文の単位をこえ、話の内容に一貫性や結束性を持たせることができる論理的思考力に直結した能力である。

4. アカデミック・イングリッシュ力の育成

日本人が論理的に書かれた英語を読んだり、論理的に英語を書いたり話したりするのが苦手なのは、単に英語力だけの問題ではない。その原因の一つは日本の国語教育にあるともいえる。我が国の国語教育は、あくまで文学的・情緒的な文章に中心がおかれているため、母語である日本語で論理的な文章を読んだり書いたり、また論理的に話したりするトレーニングを積む機会があまりない(服部[2014])。

日本の国語教育では起承転結という文章作法を教えることが多い。この起承転結は古代中国から伝わったといわれている。日本の国語教育では、論説文を書くときも起承転結に注意するというような指導がされることがよくある。起承転結とは、転で、起と承からすると外れた文章を提示し、そして結では全てがまとまるという文学的な文章を書く作法といえる。そもそも起承転結は漢詩の絶句に用いられたスタイルで第1の起句で詩思を提起し、第2の承句で起句を承け、第3の転句で詩意を一転し、第4の結句で全詩意を総合するものである。起承転結は文学作品ならともかく、論説文に向けた構造ではない。論説文はあらかじめ論点がわかっている文章である。文学作品のように予測できない話の展開や結論を楽しむものではない。論説文の場合、論理の流れが1本になっていなければならないので転が入ってはいけない。問題提起がなされ、その議論が進んでいく時に、転を入れてしまうと思考を止めてしまうことになるからである(Myskow, Underwood & Hattori[2012])。

英語の論説文の構造は大きく2つに分けることができる。1つは導入、本論、結論といった論説文全体の大きな構造である。もう1つは個々のパラグラフといった小さな構造である。この両者がきちんとしていない限りよい論説文とはいえない(服部[2014])。英語の論説文の構造を理解することがアカデミック・イングリッシュの基礎となることから、中学、高校から大学へと段階を踏んだ基礎から発展へのプログラムの開発と、適切な教

材の開発を行った。

本研究では、アカデミック・イングリッシュの力を、パラグラフ・ライティングを中心に基礎から発展へと系統的に育成する指導法と教材開発を行ったわけであるが、文部科学省スーパー・グローバル・ハイスクール・アソシエイト校認定の本学附属の中学・高等学校の全面的な協力を得ることができたので、中・高等学校での実践研究に力を入れることができた。

まず市販されている教材の研究を行ったが、それらは、はあまり参考にはならなかった。確かに最近では、パラグラフ・ライティングを扱う英語教材も増えてきたが、それらの教材は、英語のパラグラフの特徴を述べ、モデルとなる英語のパラグラフを示して、それに習う形でパラグラフを書くといったものが主流である。市販のパラグラフ・ライティングの教材を使うと、1文1文を書くセンテンスのレベルから一挙に英語のパラグラフの書き方へと飛躍してしまうだけでなく、パラグラフを書く前提となるブレーン・ストーミングをした後の情報整理をする力の育成も十分にはできない。情報を整理した上で1文1文を書くレベルから、まとまった英語の文章を書くパラグラフへの橋渡しを丁寧に扱う教材はほとんどみあたらない。情報整理からパラグラフへの段階を無理なく丁寧に指導することにより、論理のつながりを学習者に理解させることができる。その意味から、情報を整理する学習からパラグラフを書く学習へと橋渡しをする指導を可能にする教材の開発を試みた。

パラグラフを書く際の基礎となるものはいくつかあるが、その中の大切な1つが情報の分類整理力である。これはクリティカル・シンキングには不可欠である。ブレーン・ストーミングで書き出された項目を的確に分類整理できなければ、アイデアを生み出すことはできない。書き出された項目を1つの概念でくくることがまず必要となる。さらにその概念の上位概念にあたるインデックスを付ける作業も欠かすことはできない。これらのことは、パラグラフを書く際の主張を支える理由とその理由を説明する力を育成する。本研究では、論理の一貫性を持たせるため、語句を1つの概念でくくると上位概念と下位概念に分類する力をつけるための教材開発を試みた。

文は主観的な文と客観的な文、抽象的な文と具

体的な文に分けることができる。この主観的表現と客観的表現、抽象的表現と具体的表現を混同することなく的確に分類できるようになると、持っている情報を適切に整理することが可能である。本研究では、それらの分類ができるようになるための教材開発も試みた。

5. まとめと今後の課題

本研究ではアカデミック・イングリッシュの力を、パラグラフ・ライティングを中心に育成する指導法と教材の開発をするうえでの前提となる理論的研究を行い、中学、高校、大学のそれぞれの段階での、アカデミック・イングリッシュにおけるパラグラフ・ライティングの力を育成するプログラムを開発した。このことにより正確に1文を書くというレベルを超えた文章構成法の基礎から応用へと系統的に発展する一貫した指導法と教材開発に関する実践研究の基礎を確立できた。しかし、コミュニケーション能力を効果的に育成するための中学、高校、大学を連携させた系統的なプログラムの開発についての考察は十分とはいえない。

アカデミック・イングリッシュ力とは根拠に基づき論理的に考えを述べる力のことである。論理的思考力と批判的思考力を向上させることが教育的課題であるので、今後共クリティカル・シンキングとクリエイティブ・シンキングの力が身につくプログラムの開発に取り組みたい。

付記

本稿は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S2806G「中高大を連携したアカデミック・イングリッシュ力育成のための指導法と教材の開発に関する研究」）の研究助成の一部をなすものである。なお本稿以外のこの助成による発表論文等は以下のとおりである。

①雑誌論文

[1] 服部孝彦. 「パラグラフ・ライティング導入のための教材開発研究」*The JAIAS Journal*, No. 16, 日本総合文化研究会, 2016, pp.11-19.

②学会発表

[1] Takahiko Hattori, "Teaching Essential Academic Writing Skills", 日本言語文化学会第23回研究大会, 2016年6月25日, 大妻女子大学.

[2] Takahiko Hattori, "Issues Needing to be

Considered in Designing Academic Writing Course for Japanese High School Students” Hawaii International Conference on Education, 2017 International Conference, 2017年1月3日, Mid-Pacific Conference Center at Hilton Hawaiian Village, Waikiki, Hawaii USA.

引用文献

- [1] Bachman, L. F. et al. (1996). *Language Testing in Practice*. Oxford University Press.
- [2] Bachman, L. F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press.
- [3] Canale, M. (1983). On Some Dimensions of Language Proficiency. In J. Oller (Ed.) *Issues in Language Testing Research*. Newbury House.
- [4] Canale, M. et al. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1 (1), 1-47.
- [5] Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press.
- [6] 服部孝彦 (2014).「Academic English の読解力育成 : Paragraph から Essay へ」, *The JAIAS Journal*. No. 15, 日本総合文化研究会, pp. 29-41.
- [7] 服部孝彦 (2013).「Critical Thinking 力の基礎を育成するための教材開発」, *The LCA Journal*. No. 29, 日本言語文化学会, pp. 15-23.
- [8] Hymes, D. (1972). On Communicative Competence. In J. Pride & J. Holmes (Ed.) *Sociolinguistics: Selected Reading*. Harmondsworth: Penguin.
- [9] Lazark, M. (2017). *Investigating Intercultural Communicative Competence among Students*. Lap Lambert Academic Publishing.
- [10] Marshall, S. (2017). *Advance Academic Writing: Integrating Research, Critical Thinking, Academic Reading and Writing*. Pearson Education ESL.
- [11] Myskow, G. et al. (2012) *EFL Writing in Japan: Theory, Policy, and Practice*. Mediaisland.
- [12] Wallwork, A. (2016). *English for Writing Research Papers, 2nd Edition*. Springer.

Abstract

Communicative competence is a concept introduced by Hymes and discussed and redefined by many scholars. Hymes' original idea was that speakers of a language must have more than grammatical competence in order to be able to communicate effectively in a language. The framework of communicative competence in communicative language use includes four components; grammatical competence, sociolinguistic competence, discourse competence, and strategic competence. The author begins by considering the notion of discourse competence as a concept that accounts for the knowledge elements and skills employed by academic writers. In this article, the author discusses aspects of the development of academic English skills in the development of text structure and organization, lexical cohesion, and grammatical cohesion (conjunction) in the EFL class in Japan.

(受付日 : 2017年6月14日, 受理日 : 2017年9月15日)

服部 孝彦 (はっとり たかひこ)

現職 : 大妻女子大学英語教育研究所教授

米国ユニオン大学 (UIU) 大学院総合文化研究科博士後期課程修了. 博士 (Ph.D. in English).

専門は英語教育学, 応用言語学. 現在はコミュニケーション能力の理論研究とその育成に関する実践的研究を行っている.

主な著書 : *EFL Reading in Japan: Theory, Policy, and Practice* (共著, Mediaisland)